

『源氏物語』の写本を教材とした言語学演習の方法について

“The Method of Linguistics Exercises That Assumed a Manuscript of *The Tale of Genji* as a Teaching Material”

人文社会学部 人間社会学科

日本語教育学教室

浅川 哲也

はじめに

本稿は、古代日本語の文献資料を用いた言語学（日本語学）の分野に属する学部専門科目「日本語学演習」の指導内容とその指導方法について検討することを目的としている。

筆者は、学部専門科目「日本語学演習」において、『源氏物語』（11世紀初成立）を古代日本語の文献資料として採りあげ、その写本を教材として言語学の演習授業を行っている。『源氏物語』を写本影印の段階から教材として扱うという授業は、現在の日本国内の大学においても多数派とはいえ、その点においては稀少な『源氏物語』の言語学的な授業である。

本稿は、筆者が首都大学東京において担当する「日本語学演習」の演習授業をひとつの実践例として提示するものである。

1. 専門科目「日本語学演習」について

専門科目「日本語学演習」は、首都大学東京・人文社会学部・人間社会学科の日本語教育学教室の3年～4年次の専門教育科目のひとつとしてカリキュラムに位置づけられている。「日本語学演習」は、日本語学（国語学）の研究領域に属する演習形式の授業である。日本語学は、言語一般を対象とし言語に共通してみられる普遍的な事象を扱う一般言語学とは異なり、日本語の諸現象を扱う個別言語学のひとつである。

首都大学東京の日本語学の専門科目である「日本語学概論」や「日本語学講義」は講義形式の授業であるが、そこで指導した専門分野の内容に関連させ、「日本語学演習」において、演習形式によって理解を深めるというカリキュラム構成となっている。

また、「日本語学演習」は、「日本語学概論」・「日本語学講義」とともに、中学校（国語）・高等学校（国語）の教育職員免許状取得のための教職課程の専門科目でもある。

2, 「日本語学演習」の授業目標と授業概要および教材

筆者が担当している「日本語学演習」の授業テーマは「源氏物語の日本語学的読解・明石を影印で読む」である。

教科書は、『宮内庁書陵部蔵 青表紙本 源氏物語 明石』（山岸得平・今井源衛監修、白田甚五郎編、平成19年再版27刷、新典社）を使用している。教科書のほかに、授業内容に応じて補充教材のプリント資料を適宜配付する。

また、浅川（2011）、浅川・竹部（2014）を参考図書として挙げ、授業の進行内容に合わせて、適宜、参考図書にある授業内容に関連する箇所併読を推奨している。受講者による参考図書を用いた学習内容の予習活動も授業時間外学習として位置づけることができる。

この授業テーマによる「日本語学演習」の授業の到達目標は次の三点である。

- (1) 日本の中古（平安時代）和文の代表的な文学作品である『源氏物語』の青表紙系統の写本の影印本文の変体仮名および漢字のくずし字を読めるようになること。
- (2) 古代日本語である中古和文体のテキストを逐語訳で正確に現代語日本語に翻訳できるようになるとともに、中古の敬語体系を理解し、併せて現代日本語の敬語の運用に習熟すること。
- (3) 『源氏物語』を教材として、言語学の研究領域のひとつである日本語史（音韻史・文法史・語彙史など）に関する重要な項目を理解すること。

この高度に専門化された授業の到達目標の(1)・(2)・(3)を達成するには、授業時間内の学習だけでは不可能であり、必然的に受講者は授業時間外の学習が必要となる。

3, 授業計画

「日本語学演習」は、年度における前期・後期の重複履修を前提とした専門科目である¹。前期・後期の授業計画の具体例を以下に示す。授業の内容は写本影印本文の翻刻（活字化）の演習と、原文の古典文を現代語訳する演習に講義を適宜加えている。演習・講義の区別は（ ）内に示した。

【前期】

第1回：授業の方針・成績評価の方法についてのガイダンス。源氏物語の成立と書誌、源氏物語の本文（講義）。

¹ 「日本語学演習」は、教科書の進度に従って毎年度の内容を異にするので、年度を改めての重複履修も可能な専門科目である。

第2回：影印・複製本、索引と検索、源氏物語の古注・新注・現代の注釈書、源氏物語の各種現代語訳、古語辞典、研究書について（講義）。

第3回：日本語の表記史、万葉仮名、草仮名、変体仮名について（講義）。

第4回：変体仮名の読み方（1）平仮名の字源「あ行～さ行」（講義）。

第5回：変体仮名の読み方（2）平仮名の字源「た行～は行」（講義）。

第6回：変体仮名の読み方（3）平仮名の字源「ま行～わ行」（講義）。

第7回：影印本文の扱い方、影印の翻刻作業と本文校訂の方法（講義）。

第8回：影印本文の翻刻（演習）。定家仮名遣いと契沖仮名遣いについて（講義）。

第9回：影印本文の翻刻（演習）。「歴史的仮名遣い」の音読の方法（講義）。

第10回：影印本文の翻刻（演習）。中古和文の「御」の音読の方法。

第11回：原文の現代語訳（演習）。撥音・促音の無表記（講義）。

第12回：原文の現代語訳（演習）。漢字語彙の仮名表記（講義）。

第13回：原文の現代語訳（演習）。『日葡辞書』の使い方（講義）。

第14回：原文の現代語訳（演習）。源氏物語の「語り手」と言説（講義）。

第15回：前期のまとめ、筆記試験。

【後期】

第1回：前期の筆記試験の返却指導。

第2回：影印本文の翻刻（演習）。現代語の敬語—尊敬語・謙譲語Ⅰ（講義）。

第3回：原文の現代語訳（演習）。現代語の敬語—謙譲語Ⅱ・丁寧語（講義）。

第4回：原文の現代語訳（演習）。古典語の敬語—尊敬語・謙譲語甲（講義）。

第5回：影印本文の翻刻（演習）。古典語の敬語—謙譲語乙・丁寧語（講義）。

第6回：原文の現代語訳（演習）。古典語の敬語—二方面の敬語（講義）。

第7回：原文の現代語訳（演習）。四段活用「給ふ」と下二段活用「給ふる」（講義）。

第8回：影印本文の翻刻（演習）。地の文における敬語の使用・不使用の問題（講義）。

第9回：原文の現代語訳（演習）。疑いの文と問いの文（講義）。

第10回：原文の現代語訳（演習）。係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の相違（講義）。

第11回：影印本文の翻刻（演習）。係り結びの成立過程について（講義）。

第12回：原文の現代語訳（演習）。二種類の助動詞「なり」、過去・完了の助動詞（講義）。

第13回：原文の現代語訳（演習）。古代の「夜」の語彙（講義）。

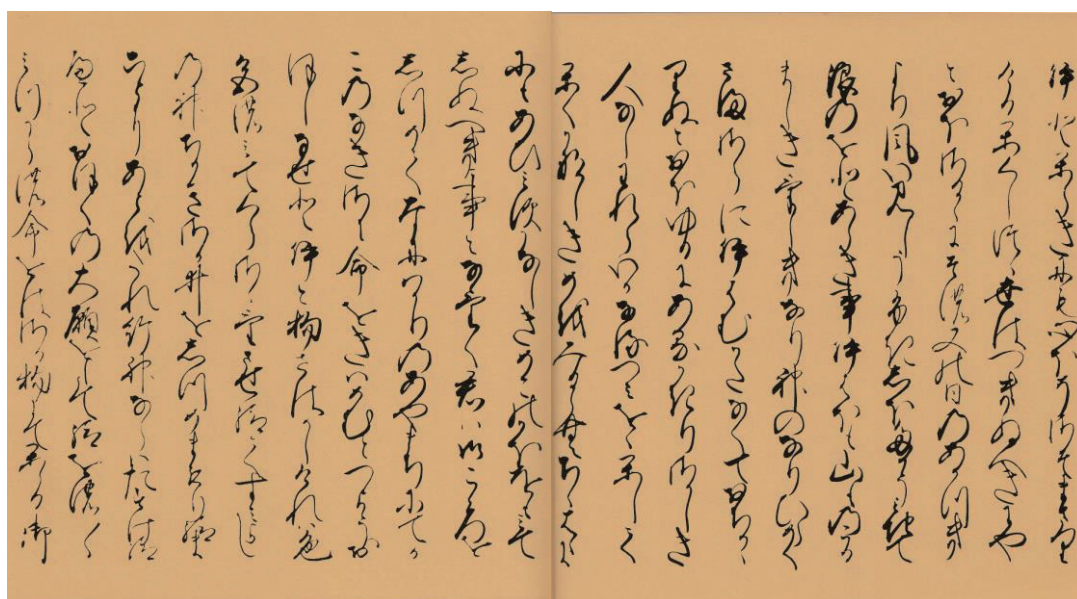
第14回：原文の現代語訳（演習）。『源氏物語大成校異篇』『源氏物語大成索引篇』の使い方（講義）。

第15回：後期のまとめ、筆記試験。

以上のように、「日本語学演習」の授業計画では、影印翻刻の演習、テキストの現代語訳の演習、日本語史等の講義の三つの指導項目を効果的に配置している。

4. 教科書（写本影印）の翻刻演習

「日本語学演習」で使用している教科書の一部（pp. 6-7）を【図1】に示す。当該の教科書は、三条西実隆（康正元年・1455年～天文6年・1537年）の花押付『源氏物語』青表紙証本の写本の複製本である。変体仮名と漢字の混じった漢字仮名交じり文の草書体で書写されており、影印資料としては、比較的読みやすい書体のテキストである。



【図1 青表紙証本 源氏物語 明石】

授業計画では、前期の第1回から第7回までの間に、補助教材「平仮名諸体及び字源一覧」²（【図2】を参照）を配付し、講義形式によって平仮名47字それぞれの変体仮名の読解方法について一字ずつ詳細に説明することとしている。

この間に「教員による講義形式による説明が終了した後は、受講者を任意に指名する方法での影印翻刻の演習形式とする」という旨の指示を受講者に対してしており、変体仮名の読解の講義の後、受講者自身によって翻刻の演習が行われるという学習意識を高めておく。

【図3】は、受講者に配布する翻刻演習用ワークシートである。【図1】に例として示した教科書本文の変体仮名等を、行位置を合わせて一字ずつ記入できるように設定し

² 『日本文学大事典』第六巻（藤村作編、昭和11年～12年、新潮社）収録。

5、本文の校訂と現代語訳用テキストプリントの作成

講義形式によって、影印翻刻の方法と模範を示し、受講者一人一人に対して演習指導をした後、次の段階として、古典文を現代語訳するためのテキストプリントを作成する上での本文校訂の指導をする。

青表紙系統の写本は、いわゆる定家仮名遣いで書写されているので、歴史的仮名遣い（契沖仮名遣い）とは一致しない箇所がある。また、ハ行転呼音の発生による語中語尾の「は行」の仮名と「わ行・あ行」の仮名との混乱が生じているので、歴史的仮名遣いを基準としてみた場合、「は・わ」・「い・ひ・ゐ」・「ふ・う」・「え・へ・ゑ」・「お・ほ・を」などの仮名の箇所に仮名遣いが生じている。

現在では、古典文のテキストは歴史的仮名遣いで統一的に表記するのが通例である³。従って、影印本文を翻刻しただけの段階では、『源氏物語』を現代語訳するためのテキストプリントとしては使用できない。この日本語表記史（仮名遣いの歴史）に関する重要な項目を「日本語学演習」の指導項目として組み入れるのである。

具体的には、定家仮名遣いで表記された教科書の影印を翻刻した後、その本文中の仮名遣いを指摘し、翻刻用ワークシートの各行のマス目の下に設けてある罫線の箇所を用い、当該箇所の行の下に記入させる。これを、次時の授業課題として指示した場合、授業時間外学習のための課題となる。

【図3】は、【図1】の影印本文を翻刻用ワークシートに筆者が手書きで記入したものである。マス目に影印本文を記入し、マス目下部の罫線には当該の行に仮名遣い（歴史的仮名遣いとは異なる定家仮名遣いなど）の語句があれば、次例のように、歴史的仮名遣いに正し、それを記入する。

〈例〉 をと（誤） → おと（正）、さはかし（誤） → さわかし（正）、
さかゐ（誤） → さかひ（正）、をの\ / → おの\ /

³ 「新日本古典文学大系」の『源氏物語』（全五冊、柳井滋・大朝雄二・藤井貞和・室伏信助・鈴木日出男・今西祐一郎編、1993～1997年、岩波書店）は、編集方針として底本の本文にある定家仮名遣いをそのまま活字化することとしており、古典文の本文を歴史的仮名遣いに整えるという点においては参考にならない。

(例) 中^中／→なかななか

五、影印本文において活用語尾のない漢字に、活用語尾を仮名で補う場合、また影印本文にない仮名を補う場合、影印本文の漢字表記に原文にない読み仮名をあてる場合は()内に示す。

(例) かしつき給→かしづき給(ふ)

雨風^(あめかぜ)→雨 風

六、「一給ふ・一奉る・一聞こゆ・一申す」など、敬語補助動詞の表記は影印本文の表記に関わらず漢字をあてる。

七、発話文(会話文)および心話文(心内文)は「」で包み、地の文と区別する。

「」中の引用文は『』で包む。

八、文の構造に留意して句読点を施す。なお、現代語訳の句読点は、原則として、整訂した本文の句読点と一致するようにする。

以上のように、本文の校訂作業の説明を加えた上で、校訂済みのテキストプリントを作成し、これを現代語訳のための教材として受講者に配付する。【図4-1】【図4-2】は、教科書【図1】に示した当該箇所を含むテキストプリントのページである。

内裏に参り給(ふ)上達部なども、すべて道閉ぢて、政も絶えてなむ侍(る)など、はかばかしうもあらず、かたくなしう語りなせど、京の方のことと思せばいぶかしうて、御前に召し出でて問はせ給(ふ)。「ただ、例の、雨の小止みなく降りて、風は時々吹(き)出でつつ、日ごろになり侍(る)を、例ならぬことに驚き侍(る)なり。いと、かく地の底徹るばかりの水降り、雷の静まらぬことは侍らざりき」など、いみじきまに驚き怖ぢてをる顔のいとからきにも、心細さぞまさりける。「かくしつづ世は尽きぬべきにや」と、思さるるに、そのまたの日の曉より風いみじう吹き、潮高う満ちて、浪の音荒きこと、巖も山も残るまじき気色なり。

【図4-1 現代語訳用テキストプリント(1)】

雷かみなりの鳴なりひらめくさま、さらに言いはむ方かたなくて、「落おちかかりぬ」とおぼ
ゆるに、ある限かぎりさかしき人なし。「我われらいかなる罪つみを犯とがして、かく悲かなし
き目めを見みるらむ。父ちち母ははにもあひ見みず、愛あなしき妻めこ子の顔かほをも見みて死しぬべき
こと」と嘆なげく。君きみは御ご心こころを静しづめて、「何なにばかりの過あやまちにてか、この渚なみに
命いのちを極きはめむ」と、強つよう思おぼしなせど、いともの騒さわがしければ、いろいろの
幣ひたひた帛ひたひた捧たてげさせ給たまへて、「住すま吉よしの神かみ、近ちかき境まかひを鎮しづめ護まもり給たまへ。まこ
とに迹あとを垂たれ給たまへふ）神かみならば助たすけ給たまへ」と、多おほくの願ねがひを立て給たまへふ。
おのおの命いのちをばさるものにて、かかろ御ご身みのまたなき例れいに沈しづみ
み給たまへ（ひ）ぬべきことのみみじう悲かなしきに、心こころを起おこして、少すこしものおほ
ゆる限かぎりは、「身みに代かへてこの御ご身み一つを救すくひ奉たてまつらむ」ととよみて、

【図 4-2 現代語訳用テキストプリント (2)】

6, 古典文の音読の方法

6-1, 歴史的仮名遣いの音読の方法

影印本文を歴史的仮名遣いに正すなど本文を整えた後、「歴史的仮名遣い」で書かれた古典文についての伝統的な読み方（音読法）を指導する。古典文を音読するという行為は、言語学的な高度の知識と経験とを必要とするものであり、それは、次の a・b の原則に基づいている。

- a 原則として、江戸時代前期（1700 年前後のころ）の上方語での読み方に拠る。
- b 体系的に変化したものは、その変化の結果で読むが、個別的なものは、できるだけ原文の時代の形にもどして読む。

(1) ハ行転呼が生じている語は、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」を「ワ・イ・ウ・エ・オ」と読む。「かは（川）」は「カワ」、「よひ（宵）」は「ヨイ」、「言ふ」は「イウ」、「まへ（前）」は「マエ」、「かほ（顔）」は「カオ」、「たまひて（給ひて）」は「タマイテ」。

(2) ハ行転呼が生じていない語は、語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」を「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」と読む。「ろくはら（六波羅）」は「ロクハラ」、「そこはかとなし」は「ソコハカトナシ」、「まほし」は「マホシ」。

- (3) 二つの母音が重なる「開音」(au) は、オ段長音で読む。「たまふ (給ふ)」は「タモー」、「堪へがたう」は「タエガトー」、「あふぎ (扇)」は「オーギ」。
- (4) 二つの母音が重なる「合音」(eu・ou) は、オ段長音で読む。「けふ (今日)」は「キョー」、「せうそこ (消息)」は「ショーソコ」、「てふ (蝶)」は「チョー」、「思ふ」は「オモー」「問ふ」は「トー」。
- (5) 「イウ」(iu) は、ウ段長音で読む。「久しう」は「ヒサシュー」、「をかしう」は「オカシュー」。
- (6) 「む」は、撥音の「ン」で読む。「ひむがし (東)」は「ヒンガシ」、「なむ」は「ナン」。
- (7) 合拗音「くわ」・「ぐわ」・「くゑ」・「ぐゑ」などは、直音の「カ」・「ガ」で読む。「くわんじや (冠者)」は「カンジャ」、「くわんにん (官人)」は「カンニン」、「ぐわんもん (願文)」は「ガンモン」、「へんぐゑ (変化)」は「ヘンゲ」。
- (8) 清音・濁音 (清濁) の区別は、原文の時代の形で読む。平安時代の清濁の区別は、『るいじゆみょうぎしやう類聚名義抄』(漢和辞書、平安時代末期成立)、『へいきよく平曲』(琵琶法師による『平家物語』の語り、鎌倉時代の清濁を伝承するもの) などに見られる語の清濁の区別 (これを「古形」とする) を基準とする。古形が清音であったものが後に濁音化する例が圧倒的に多い。古形が濁音であって、後に清音となる語は極めて稀である。

〈古形が清音の語〉

うちき (桂)、おぼろけなり、かかやく (輝く)、かへすかへす、
 からきぬ (唐衣)、からころも (唐衣)、こたま (木霊)、ふせく (防く)、
 そそく (注く)、いちしるし (著し)、そばたつ (峙つ)

〈古形が濁音の語〉

まだたく (瞬く) > またたく、
 かはぼり (蝙蝠) > かわぼり > かわぶり > かわもり > かうもり > こうもり
 わくらばに > わくらは (ワクラワ)

和久良婆爾 〈万葉集・5-892・8世紀〉、Vacuraua 〈日葡辞書・1603年〉

6-2, 中古和文の「御」の読み方

古典文音読の重要な問題として漢字表記の「御」をどのように音読するかということがある。影印本文には漢字表記で「御」が頻出する。「御」は、「大御 (おほみ)」を語源とする敬語の接頭語であり、「御 (おほむ)」>「御 (おほん)」と音韻変化を生じて平安時代に至る。しかし、「御」には「御 (み)」・「御 (ご・ぎょ)」など複数の読み方が

考えられるので、古典文を音読する場合の基準が必要となる。中古和文では「御」は原則として「おほん」と三拍で音読するが、音読方法の原則を具体例とともに示すと、一～三ののとおりである。

一、「おほむ・おほん」

おほんあそび（御遊）、おほむあたり（御辺）、おほむあふぎ（御扇）、おほむありき（御歩）、おほんありさま（御有様）、おほむあるじ（御主）、おほんいとま（御暇）、おほんいのり（御祈）、おほむいらへ（御答）、おほんうた（御歌）、おほむうつくしみ（御慈）、おほむが（御賀）、おほむかたち（御容）、おほむかはり（御代）、おほんかへし（御返）、おほんかへりごと（御返事）、おほんかみ（御神）、おほむくだもの（御果物）、おほむくだり（御下）、おほむくどく（御功德）、おほむくるま（御車）、おほむけしき（御気色）、おほむご（御碁）、おほんこち（御心地）、おほんころ（御心）、おほむころざし（御志）、おほむころならひ（御心習）、おほむこと（琴）、おほんこと（御事）、おほむことのは（御言葉）、おほむざ（御座）、おほんざうし（御曹司）、おほむさま（御様）、おほむしぞく（御親族）、おほむしとね（御褥）、おほむすがた（御姿）、おほんすまゐ（御住居）、おほんせうと（御兄人）、おほんぞ（御衣）、おほんそうふん（御処分）、おほんたいめむ（御対面）、おほむため（御為）、おほんつかひ（御遣）、おほむてづから（御手づから）、おほんとき（御時）、おほんとのあぶら（御殿油）、おほむなか（御中）、おほんはかま（御袴）、おほんはじめ（御初）、おほんはらから（御同胞）、おほんふね（御舟）、おほんふみ（御文）、おほんべ（御嘗）、おほんめ（御目）、おほんめぐみ（御恵）、おほんめのと（御乳母）、おほんものいみ（御物忌）、おほんものがたり（御物語）、おほむやまい（御病）、おほむゆかたびら（御湯帷子）、おほんよ（御世）、おほんよろこび（御喜）、おほむれう（御料）

二、「おほむ・おほん」以外の例。

(1) 「お」・・・語頭がマ行音の場合が多い。

おとも（御供）、おまし（御座）、おまへ（御前）、おもと（御許）

(2) 「み」

(2-1) 宮中・殿舎関係

みかど（御門／帝）、みかはみづ（御溝水）、みくしげ殿（御匣殿）、みくら（御倉）、みこ（御子／皇子）、みざうし（御曹司）、みずいじん（御隨身）、みたち（御館）、みづしどころ（御厨子所）、みはし（御階）、みやすむどころ（御息所）、みよ（御代）

(2-2) 仏教関係

みあかし (御灯)、みすほふ (御修法)、みだう (御堂)、みてら (御寺)、みどきやう (御読経)、みのり (御法)、

(2-3) 神祇関係

みあれ (御生れ)、みてぐら (幣)、みてぐらづかひ (幣使ひ)、みやしろ (御社)、

(2-4) 調度関係

みかうし (御格子)、みき丁 (御几帳)、みさうし (御障子)、みす (御簾)、みぞかけ (御衣掛)、みぞひつ (御衣櫃)、み帳 (御帳)、みづし (御厨子)、みびやうぶ (御屏風)、

(2-5) その他

みありさま (御有様)、みあるじ (御主)、みかほ (御顔)、みくるま (御車)、みけうそ (御教書)、みこころ (御心)、みさう (御荘)、みさと (御里)、みしやう (御荘)、みな (御名)、みねんぐ (御年貢)、みはら (御腹)、みふ (御封)、みふだ (御簡)、みふね (御舟)、みまき (御牧)、みまや (御厨)、みむすめ (御女)、みやま (御山)、

(3) 「ご・ぎよ」

ごかち (御加持)、ごぜ (御前)、ごたち (御達)、ぎよいう (御遊)、ぎよい (御衣)、ぎよせい (御製)

三、「おほんー」・「みー」の両形がある語

「おほんー」・「みー」の両形ある語は「おほむ」が地の文、「み」が会話文に使用される傾向があると考えられる。次例は、／の両側に両形のある語を挙げたものである。

おほむありさま／みありさま、おほむあるじ／みあるじ、おほむうた／みうた、おほむうへ／みうへ、おほむおぼえ／みおぼえ、おほむおもひ／みおもひ、おほむかけ／みかけ、おほむかた／みかた、おほむかたち／みかたち、おほむけはひ／みけはひ、おほむこち／みこち、おほむころ／みころ、おほむころざし／みころざし、おほむころばえ／みころばえ、おほむこと／みこと、おほむぎ／みぎ、おほむざうし／みざうし、おほむさと／みさと、おほむすくせ／みすくせ、おほむつぼね／みつぼね、おほむて／みて、おほむてら／みてら、おほむな／みな、おほむなか／みなか、おほむふね／みふね、おほむむすめ／みむすめ、おほむもと／みもと、おほむよ／みよ、

7. 古典文の現代語訳

これまでの指導の過程で完成したテキストプリントを用いて、古典文を現代語訳する

ための指導段階に入る。古典文の助詞・助動詞の用法、敬語法など基礎的な古典文法上の指導項目が大量にあるので、前期での現代語訳の最初の段階では、講義形式によって教員が現代語訳の模範例を示すことになる。

ただし、【図5】に示す「演習分担の周回表」を事前に受講者に配布し、授業時に現代語訳の演習発表をする順番を受講者間で定めておき、演習形式で、受講者による現代語訳の発表をすることを予告しておく。

受講者による現代語訳の演習発表に際しては、【図4-1】【図4-2】のテキストプリントに、受講者1名が現代語訳を担当する分として、テキストプリントに2～3行ずつ区切りを入れ、1番、2番、3番…のように分担番号を付していく。この番号は、【図5】の周回表にある「順番」に対応するものであり、履修者人数の全員が現代語訳の演習発表を担当したら、二巡目に入り、順次、現代語訳の演習発表を繰り返すのである。

現代語訳のテキストプリントが残りわずかになった場合は、次週に受講者を任意に指名して影印本文を1行ずつ読解させる形式の写本影印の翻刻演習を行うとともに、現代語訳用のテキストプリントを補充していく。

源氏物語 須磨・明石 周回表 2016

順番	氏名	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
1		1													
2															
3															
4															
5															
6															
7															
8															
9															
10															
11															
12															
13															
14															
15															
16															
17															
18															
19															
20															

【図5 現代語訳の演習分担の周回表】

配付されたテキストプリントは、その全文を受講者全員が現代語訳しておくことが望ましいが、演習授業に臨む受講者の動機付けには個人差があるため、受講者による現代語訳の演習にあたっては、あらかじめ、現代語訳をする本文の箇所を分担を受講者ごとに決めておく。

すなわち、演習授業における最低限の分担を決めておくわけであるが、その際に、少なくとも、自分の分担箇所を含めて、その前後の分担箇所（発表順序の前後の発表担当

者の分担箇所)の原文の現代語訳を授業時間外学習として準備(予習)しておくことを、毎時の授業の課題とする。従って、【図5】の周回表は、現代語訳の発表演習の進捗状況を受講者が把握するためのものである。

8. 古典語の敬語と現代語の敬語の対照的な理解

『源氏物語』を教材とした「日本語学演習」で最も重点的に指導している項目が「敬語」である。古典語(狭義)の敬語の分類について、主な説を整理してみると【図6】のとおりである。



【図6 日本語の敬語体系】

「素材敬語・自卑敬語・对者敬語」、「尊敬語・謙讓語(甲)・謙讓語(乙)・丁寧語」、「主体敬語・客体敬語・対話敬語」のように、破線で囲まれた敬語の分類名称は一つの敬語体系を成す。「…」の右は説明文である。

素材敬語とは、話題の中(会話の中、手紙・物語の中)に登場する人物を高く遇する敬語である。古典文学では、地の文の表現主体としての作者(『竹取物語』など)、または、地の文の語り手として設定されている作中人物(『源氏物語』・『大鏡』など)が、話題の中で言及している人物に対して用いる敬語である。自卑敬語とは、話し手が、目の前にいる会話の聞き手に対して、自分自身を低める敬語である。对者敬語とは、話し手が、目の前にいる会話の聞き手を高く遇する敬語である。

尊敬語とは、ある動作をする人物を高く遇する敬語である。尊敬語は主体敬語(動作主体敬語)ともいう。主体敬語とは、ある動作をする人物を対象にして敬意を表わす敬語である。謙讓語(甲)とは、ある動作を受け取る人物を高く遇する敬語である。謙讓語(甲)は客体敬語(動作客体敬語)ともいう。客体敬語とは、ある動作を受け取る人物を対象にして敬意を表わす敬語である。

この【図6】によって、敬語の三分類では「謙讓語」として一つにまとめられている敬語が、素材敬語・客体敬語としての謙讓語(甲)と自卑敬語・対話敬語としての謙讓語(乙)との異質な二種類の敬語であるということが理解できる。

古典語の敬語において謙讓語が二種類あるのと同様に、現代語の謙讓語にも二種類あることが、菊地康人氏によって次例のように指摘されている⁴。

A「私はそのやくざに、足を洗うように申し上げます。」

B「私はそのやくざに、足を洗うように申しました。」

例文Aは、敬意の向かう方向が「私→やくざ」で、「やくざ」を高く遇する文となっており、特殊な文脈または場面を必要とする文となっている。結果として、例文Aは単独の文としては不自然な内容になる。それに対して、例文Bは敬意の向かう方向が「私→会話の相手」で、会話の相手を高く遇する文となり、単独の文としては違和感なく成立する。これは、現代語の謙讓語「申し上げる」と「申す」とでは、謙讓語としての性質が異なるという事実を示している。

菊地氏は、現代語のこの二種類の謙讓語を「謙讓語A」・「謙讓語B」として分類している。「謙讓語A」（申し上げる）は、話題の中の人物に対する敬語であり、「謙讓語B」（申す）は、いま会話をしている相手に対する敬語である。つまり、現代語においても、「申し上げます」と「申します」とは使い分けがなされているのである。

この現代語の「謙讓語A」が、古典語の「謙讓語（甲）」に相当するものであることは明らかである。古典語の謙讓動詞「聞こゆ」の例文と、その現代語訳を挙げる。

（源氏は紫の上に対して）よろづにこしらへ聞こえ給へど、…

（源氏は紫の上に対して）手を尽くしておなだめ申し上げなさるけれど、…

この用例は地の文であるので、敬意の方向は「語り手→紫の上」ということになるが、紫の上は、源氏の「よろづにこしらふ」という動作を受ける人として謙讓語（甲）が使われている。また、例文には尊敬語の補助動詞である「給ふ（四段活用）」が使用されているので、動作主体敬語（尊敬語）と動作客体敬語（謙讓語I）とが一つの文で同時に使用されている「二方面の敬語」の例文ということになり、これも重要な指導項目である。

9. 期末筆記試験による指導内容の定着化

前期・後期それぞれに披見一切不可の試験形式で期末筆記試験を実施する。筆記試験の問題は全部で三問である。

第一問は、教科書の影印本文を翻刻する問題である。授業範囲で演習として扱った教科書の中から、10～11行の文を複写して出題する。

第二問は、影印の翻刻の後に整訂した原文を現代語訳する問題である。授業範囲で演

⁴ 菊地康人（1997）『敬語』講談社学術文庫

習として扱ったテキストプリントの中から、5～6問を出題する。

第三問は、講義形式で解説を加えてきた、日本言語史（音韻史・語法史・語彙史）や、本文中に現われる漢字語彙⁵などに関する事項について、4～5問を出題し、これを記述式で解答させる問題である。過去3年間に⁵出題した第三問の実例を以下に示す（原文は縦書き）。重要な事項は毎年度繰り返して出題されることとなるので、内容上で重複する設問がある。

【2015年度 前期筆記試験の記述問題】

(1) 『源氏物語』において、動作主体・動作客体が敬語を使うべき人物であっても、敬語を使わなくても良い場合について具体的に例を挙げて説明しなさい。また、敬語を使うべき人物であっても敬語をあえて使わない例について説明しなさい。

(2) 次の文は『土佐日記』の冒頭箇所である。傍線部分について詳しく説明し、現代語訳を示しなさい。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

(3) 次の歌は『万葉集』中の歌である。この歌を例にして、「ぞ一連体形」の「係り結び」の成立について説明しなさい。ただし、奈良時代の係助詞「そ」は清音であり、後に濁音化して「ぞ」になったことは無視して良い。

秋風の吹きにし日よりいつしかと我が待ち恋ひし君そ来ませる

(4) 『源氏物語』の語り手の身分について、源氏・大宰大貳・筑前守に対する敬語運用に言及しながら説明しなさい。

【2015年度 後期筆記試験の記述問題】

(1) 古代における「夜」の時間帯の区分について、具体的な名詞を挙げて説明しなさい。

(2) 伝聞推定の助動詞「なり」と、断定の助動詞「なり」について、それぞれの活用の仕方と、語源を比較して論じなさい。

(3) 連語「べかんなり（べかなり）」の「なり」は、伝聞推定の助動詞である。なぜ、「べかんなり（べかなり）」のような語形の連語が成立するのか、助動詞「なり」の接続の仕方の観点から説明しなさい。

(4) 次のA～Cの文中の「まゐる」の意味について説明しなさい。

A 「(源氏は) 夜深く御手水まゐり、念誦などし給ふも、・・・」

B 「(源氏の) 物まゐれるなど、ことさらに所につけ、・・・」

⁵ 『源氏物語』に現れる漢字語彙については、『学研漢和大辞典』（藤堂明保編、昭和53年、学研）などを利用して、古代中国語音に遡ってその音韻を復元し、テキスト中の仮名表記との比較を試みている。

C「(海士どもが) 貝つ物持て参れるを、(源氏は) 召し出でて御覽ず。」

【2016年度 前期筆記試験の記述問題】

- (1) 「御」の読み方として、「お」・「おほん」・「み」の違いについて具体例を挙げて説明しなさい。
- (2) 四段活用の補助動詞「給ふ」と、下二段活用の補助動詞「給ふる」の違いについて、活用の仕方、上接語の種類、使用される文体、意味用法の四点について、具体的に説明しなさい。
- (3) 謙譲語動詞・謙譲語補助動詞の「申す」・「聞こゆ」の意味用法上の違いについて説明しなさい。
- (4) 「奉り給ふ」・「申し給ふ」について、文法的に詳しく説明しなさい。

【2016年度 後期筆記試験の記述問題】

- (1) 『日葡辞書』(1603年成)にある「Ficazu. Nixxu.」という見出し語を参考にして、『源氏物語』(11世紀)における「日数」の読み方について説明しなさい。
- (2) 青表紙証本の「明石」にある次の本文の傍線部について説明しなさい。
「我ながらかたじけなく、屈しにける心のほど思ひ知らるる。」
- (3) 疑いの文と、問いの文の相違について、構文の観点から説明しなさい。
- (4) 古代における「夜」の時間区分を表わす語彙について説明しなさい。

【2017年度 前期筆記試験の記述問題】

- (1) 仏教語「新発意」の音価と仮名表記について説明しなさい。
- (2) 古代における「夜」の時間区分を表わす語彙について説明しなさい。
- (3) 疑いの文と、問いの文の相違について、構文の観点から説明しなさい。
- (4) 四段活用の補助動詞「給ふ」と、下二段活用の補助動詞「給ふる」の違いについて、活用の仕方、上接語の種類、使用される文体、意味用法の四点について、具体的に説明しなさい。

【2017年度 後期筆記試験の記述問題】

- (1) 格助詞・係助詞・副助詞の相互承接の関係について説明しなさい。
- (2) 古典文の尊敬語の接頭語「御」を、現代語で「お」と訳した場合に、「お」が尊敬語である場合と、「お」を含む語が美化語になる場合との違いについて考察しなさい。
- (3) 係り結びのうち、「こそ一已然形」の成立起源について説明しなさい。
- (4) 謙譲語「申す」と、謙譲語「聞こゆ」の意味用法上の相違について説明しなさい。

ここに示したように、第三問の記述問題は、『源氏物語』および日本語史の分野の設問として難易度の高い出題内容となっている。

いずれの問題も授業時に、補充資料などを用いて詳細な解説を加えているのであるが、披見不可の筆記試験の記述問題であるので、第三問に限っては、期末筆記試験実施時の前週である最終授業時に、前期（または後期）の授業のまとめの一環として、筆記試験問題の第三問の記述問題をあらかじめ教室に全文掲示することとしている。

記述試験の問題を事前に示すことによって、受講者は筆記試験の準備に際して、それまでの授業内容を復習し、記述問題の正答例を自ら作成することができる。その記述問題の筆記試験準備の過程が授業時間外学習となり、演習授業の内容を復習し、また自ら考察するための機会となるのである。

おわりに

「日本語学演習」では、2節に示した授業の到達目標を達成するために、受講者に対して以下のとおりの授業時間外学習を課している。

- (1) 影印翻刻の演習発表の準備。
- (2) 現代語訳の演習発表の準備。
- (3) 期末筆記試験の記述問題（第三問）の標準解答例の事前作成。

「日本語学演習」は、これまで述べてきたとおり、古代日本語の言語資料（『源氏物語』など）を教材とした高度の専門教育科目である。この授業の到達目標のためには、受講者は、必然的に相当な時間を授業外学習にあてなければならない。受講者がその授業外学習を行うための環境整備と動機付けのためには、指導者である教員自身もまた演習授業の運営を適切に配慮し工夫しなければならない。

古典語の演習授業は、語学習得の演習授業である。基礎的な言語事項の段階的積み重ねという点で、英語やドイツ語、フランス語などのような、外国語学習の演習授業となんら変わるところがない。

『源氏物語』の写本影印を教材として行う「日本語学演習」は、古代語と近代語⁶（現代日本語）とを比較対照することによって、受講生にとって母語である現代日本語を相対化し、また、母語である現代日本語と客観的に向き合う機会を演習授業として提供することができる。従って、古代語と現代日本語との対照研究が可能になるのである。

古典文を読むという行為は、古代日本語と現代日本語との相違を認識する言語行為であり、実は現代日本語を言語として研究することなのである。

⁶ 日本語史を二区分する場合、古代語（飛鳥・奈良時代～室町時代）と、近代語（江戸時代～現代）とに二分される。現代日本語は近代語に属する（浅川 2013）。

【参考図書】

- 浅川哲也(2005)「古文は声に出して読めるのかー古文音読指導上の問題点ー」『国語界』
52号
- 浅川哲也(2007)「匂宮はニオウミヤー宮に「の」が上接しない例ー」『都大論究』第
44号
- 浅川哲也(2009)「源氏物語と敬語法ー「若紫」地の文における敬語の不用についてー」
『國學院の古典』第5輯
- 浅川哲也(2010)『源氏物語』地の文における帝に対する敬語使用について『新国学』
復刊第2号
- 浅川哲也(2011)『知らなかった！日本語の歴史』東京書籍
- 浅川哲也(2013)「日本語史における「現代語」とは何かー日本語史の時代区分につい
ての一提言ー」『都大論究』第50号
- 浅川哲也(2015)「女三宮はニョサンノミヤー保坂本にある〈女御宮〉とその周辺ー」
『言語の研究』第1号
- 浅川哲也(2016)『源氏物語』における語り手の敬語不使用についてー〈語り〉の構造
から「敬語の文学的考察」を再検討するー』『国語研究』第79号
- 浅川哲也・竹部歩美(2014)『歴史的变化から理解する現代日本語文法』おうふう